形態的根拠から導かれる音法則[1]
——ヒッタイト語の例——

吉田　和彦

Ⅰ．言語の先史の再構成

比較言語学のもっとも重要な課題は、同系統に属する諸言語を比較することによって、かつて存在したそれらの言語の源であるところの祖語を再建し、それぞれの言語がどのような歴史を経て成立したのかを明らかにすることにある。先史を再構成するというこの作業においてもっとも重要となるのが、分派諸言語のあいだにみられる対応を合理的に説明できる音法則を発見することである。非常によく知られている例をあげると、たとえば「３」を意味するサンスクリット *tráyaḥ*、ギリシア語τρεῖς、ラテン語 *trēs* とゴート語の*þrija*（中性）の初頭音の対応に基づいて、印欧祖語の**t* がゲルマン祖語で**þ*になるという変化が考えられる。しかしながら、うえのいわゆる「グリムの法則」とよばれる音法則では説明できない対応もみられる。たとえば、サンスクリット *pitā́*「父」、ギリシア語πατήρ、ラテン語 *pater* の語中の *t* がゴート語 *fadar* において*þ*ではなく、*d* で対応するといった例である。この対応を説明するために、別の新たな音変化がゲルマン語のほうで特定の条件のもとで生じたという提案がなされる。これは「ヴェルネルの法則」として有名な、ゲルマン祖語の無声摩擦音は直前にアクセントがない場合、有声化するという条件変化である。ヴェルネルがこの法則を提案したときに注目したのはアクセントの位置であるが、ゲルマン祖語のアクセントの位置については、分派諸言語であるゲルマン諸語ではなく、サンスクリットとギリシア語が決定的な役割を果たした。つまり、ゲルマン祖語の段階では印欧祖語におけるアクセントの位置がそのまま保持されたと考え、印欧祖語の時期のアクセントの位置を知るために、書記のうえでアクセントを記しているサンスクリットとギリシア語からの情報を用いたのである。これは「逆方向の再構成(inverted reconstruction)[2]」のひとつの例と考えられる。

うえの例は、複数の音法則とそれらが働いた歴史的な順序を決定することによっ

---

[1] 本稿は1996年12月7日に京都産業大学で開かれた西アジア言語研究会で発表したものである。研究会の席上でコメントをくださった方々にお礼申し上げる。また、本研究を推進するにあたっては、三菱財団から受けた学術研究助成金の一部を利用させていただいた。

[2] inverted reconstruction については、Anttila (1972: 346)で述べられている。

て、言語間にみられる音対応が説明される例である。しかしながら、音韻分析だけによって対応が説明できるとは限らない。特に印欧語の場合、言語変化を引き起こすものとして音法則だけではなく、類推という形態的な要因がかかわっていることが多い。音法則と類推との関係については、音法則は規則的に適用されるが、不規則性をうみだすのに対して、類推は不規則に働くが、規則性をもたらすと一般に言われる[3]。つまり、音法則は形態的あるいは意味的な情報に関係なく働くために、規則的なパターンから逸脱するような形式を作り出すのに対して、類推は形態的な要因によって、例外的にみえる形式をより一般的な形式に変えるのである。したがって、音法則の例外となる形式に対して類推による形態変化を提案する場合、その形態変化を動機づける十分な要因が備わっていることが必要となる。また逆に、無理のない形態変化によって音法則の例外が説明できるならば、それによって音法則自体の妥当性も裏づけられるのである。

音法則と類推による形態変化はそれぞれ独立した、性格の違うものであるが、この2つの視点を有機的に結びつけることによって言語の先史が解明されるひとつの例をアナトリア語派からあげてみたい。筆者は以前、アナトリア祖語の語末の*-*r*は直前にアクセントが落ちない場合に消失するという音法則を提案した[4]。この音法則を提案する動機になった現象は、ヒッタイト語の現在中・受動態語尾に任意に付与されると考えられていた-*ri* という要素のヒッタイト内部での歴史的な分布であった。伝統的な見方と異なり、この-*ri*がいつ現れるかは決して予測不可能ではない。つまり、-*ri*は後期ヒッタイトではほぼ一般化されているのに対して、古期ヒッタイトでは*a*-クラスの3人称単数にのみ顕著である。しかも、アクセントの位置を反映する scriptio plena（母音の盈記）を語尾に持つ *a*-クラスの3人称単数（たとえば *du-uq-qa-a-ri* "is visible" KUB XXIX 1 II 10）は、常に-*ri*でマークされている。また、これとまったく平行する事実が同じアナトリア語派のパラー語*ḫa-a-ri* "is warm" KBo XIX 152 I 14にもみられる。したがって、印欧祖語の現在中・受動態を特徴づけていた*-*r* は[5]、アナトリア祖語の段階で直前にアクセントがない場合は脱落したが、存続した場合、能動態現在をマークする小辞*-*i*が類推によって付与された結果、*-*ri*という形式で再びアナトリア諸語に徐々に広がったと考えられる。この*-*ri*の2次的な広がりは、*-*r*の消失によって現在中・受動態動詞の機能的位置が不明瞭になったことによって動機づけられる。

---

[3] これは、「スタートヴァントのパラドックス」として広く知られている。

[4] Yoshida (1990: 112ff.)を参照されたい。

[5] ラテン語-*tur*、古期アイルランド語-*dar*、トカラ語 A、B -*tär* という中・受動態語尾を参照。ただし、ラテン語と古期アイルランド語では、-*r*は過去を表す2次語尾にも広がっている。

うえの音法則は、語末に*-*r*を持つ他の形式にもはたらいた。そのうち重要なものとしては、*r*/*n*-語幹名詞がある。語末に-*r*を欠く*r*/*n*-語幹名詞の主格・対格の形式は、すべて古期および中期ヒッタイトのテキストに現れ、しかも複数形に限られている（たとえば、NINDA*u̯a-GI-eš-ša* "loaf" KBo XVIII 30 III 7）。*r*/*n*-語幹名詞の複数形は印欧祖語において amphikinetic タイプの母音交替を示し、その主格・対格はアクセントを持つ*e*-階梯の語根と*o*-階梯の接辞によって特徴づけられる(たとえば、**u̯éd-or* "water (pl.)")。したがって、*-*r*が脱落するための構造記述を満たしているので、複数形にみられる-*r*の欠如は音法則によって説明される。他方、*u̯a-a-tar* "water (sg.)"に代表される単数形には、-*r*の脱落が決してみられない。これを合理的に説明するには、単数形は複数形とは別の母音交替のタイプを示していて、接辞は零階梯であったと考えなければならない（*u̯a-a-tar* < **u̯ód-r̥*）。つまり、語末の*-*r*の消失という音法則がはたらいた時点では、単数形は*-*r*ではなく音節を形成する*-*r̥*で終わっていて、その後に*-*r̥*が*-*ar*になったという歴史的な順序を２つの音法則のあいだに認めることで説明できる（下に示した派生を参照）。

	単数	複数
アナトリア祖語	*´-*r̥*	*´-*ar* (< *´-*or*)
語末の*-*r*の消失	——	*´-*a*
*-*r̥* > *-*ar*	*´-*ar*	——
古期ヒッタイト	-*ar*	-*a*

後期ヒッタイトの複数形において-*r*が復活しているのは、対応する単数形の主格・対格からの２次的な影響による。いうまでもなく、語末に-*r*を欠く形式はその機能的位置が不明確であるので、この形態変化には十分な動機づけがある。

語末の*-*r*の消失規則がはたらいたと考えられうるもうひとつの潜在的な形式は、能動態３人称複数過去語尾-*er*、-*ir*である。この形式について、筆者は以前つぎのような歴史的説明を考えていた[6]。起源的には-*er*、-*ir*という３人称複数語尾は*ḫi*-動詞の特徴であったが、*ḫi*-動詞には語幹が-*i*-で終わり、語尾にアクセントの落ちる*piēr* "they gave"、*ḫalziēr* "they called"、*išpiēr* "they sated themselves"に代表される一連の動詞が含まれている。これらの動詞は語尾にアクセントを持っていたために[7]、語末の*-*r*は脱落しなかった。さらにこのタイプの動詞に加えて、**i̯é/ó-*、**sk̑é/ó-*という接辞を持つ多くの動詞がある。本来*ḫi*-動詞に固有の３人称複数の-*r*が*mi*-動詞に

[6] Yoshida (1990: 114)を参照。

[7] 語尾は-*e-IR*と綴られている。

も広がったとき（*-ent → *-er）、これらの動詞は語尾にアクセントを持っていたため（*-i̯ént、*-sk̑ént → *-i̯ér、*-sk̑ér）、語末の*-r は保存された。これらの*-r を保存した動詞からの形態的影響によって、*´-er というタイプの動詞も、音法則によって*-r をいったん失った後、再び*-r を回復した。

しかしながら、この見方に対して部分的な修正を要求する言語事実が後に明らかになった。それは、*ša-ú-ši-i̯a-ar* "they investigated" Maşat-Brief 6, Rs. 22 や*ú-e-mi-i̯a-ar* "they found" KUB XVII 10 I 37 にみられる 3 人称複数過去の*-ar* という語尾の存在である[8]。重要なことに、これらの例は古い時期のヒッタイトの粘土板に記録されているために、*-ar* という語尾は*-er* の一般化を受けなかった貴重な形式とみなすことができる。言語の先史というものは、新しいデータの発見やよりすぐれたデータの解釈によって常に改変される性格のものであるが、このヒッタイト語の*-ar* という形式も 3 人称複数過去語尾の先史についてより正確な理解を可能にしてくれる。すなわち、*-er* と*-ar* という 2 つの語尾は量的母音交替を反映するもので、それぞれアクセントの落ちる正常階梯の*-ér とアクセントの落ちない零階梯の語尾*´-r̥ に遡ることが分かる[9]。したがって、ヒッタイト語の 3 人称複数過去語尾については、語末の*-r の消失規則が適用される環境になかったことが明らかになる。以上の分析を図式的に示すと、以下のようになる。

アナトリア祖語の初期の段階：　*mi*-動詞　*-ént ~ *´-n̥t
　　ḫi-動詞　*-ér ~ *´-r̥

アナトリア祖語の後期の段階：　*mi*-動詞　*-ént ~ *´-n̥t ~ *-ér
　　ḫi-動詞　*-ér ~ *´-r̥

アナトリア祖語の初期の段階においては、*mi*-動詞の語尾も*ḫi*-動詞の語尾もともに量的母音交替を示していた。しかしながら、アナトリア祖語の後期の段階で本来*ḫi*-動詞に固有の*-r は *mi*-動詞にも広がった。そして、ヒッタイト語はその先史において*-r によって特徴づけられる語尾を、過去を表す一般的なマーカーとして *mi*-動詞に

---

[8] これは Neu (1989)によって指摘されたが、この Neu の論文が実際に発表されたのは 1991 年のことである。

[9] Neu 自身は*-ar* が*-or に遡ると考えているが、この見方は支持できない。*-or という語尾は一般的な母音交替の原理からまったく逸脱している。また、すでに *r/n*-語幹名詞に関してみたように、成節的ソナントがアナトリア祖語の段階で存続していたことを示す独自の根拠は別個に存在する。

も*hi*-動詞にも一般化した[10]。

本節で示した一連の分析から言えることは、決して目新しいことではない。それは、言語の先史を再構成しようとする試みにおいてはデータの細部にまで目を配り、さまざまの角度からの歴史的説明の可能性を考えなければならないということである。なにより重要となるのは音法則の設定であるが、それを支持する十分な根拠をデータから引き出さなければならない。また、音法則の例外となる事実に対しては、別の新たな音法則を建てたり、複数の音法則のあいだの歴史的な順序を考えることも必要になる。さらに、類推による形態変化を提案する場合にも、それを動機づける強い理由があるかどうかを綿密に検討しなければならない。このような音韻分析と形態分析の組み合わせによる説明が、ときにはほとんど循環論的になることは否めない。しかしながら、分析全体の整合性という視点からみてもっとも妥当な見方を提示しなければならない

II. 問題の所在

音法則を提案する場合、それを直接裏づける音韻的根拠がデータのなかにあるのが通常である。前節で示したアナトリア祖語の語末の**-r*の消失という音法則についても、他の印欧諸語との比較によって中・受動態動詞や *r/n*-語幹名詞に本来備わっていたと考えられる語末の**-r* がアナトリア諸語においてみられない例があるという事実が、この音法則を提案する大きな動機であった。

ところが、これから述べようとするのは、音法則の設定が音韻的根拠ではなく、形態的根拠によって裏づけられる例である。音韻的根拠を欠く音法則という言い方は奇妙に聞こえるかもしれないが、音法則を支える音韻的根拠が２次的な形態変化を蒙って姿を変えた場合にはあてはまる。具体的に問題になるのは、最近 Melchert が発表したアナトリア史的音韻論に関する大部な著書のなかで提案したつぎの２つの音法則である[11]。

アナトリア祖語 **´-eN#* > ヒッタイト語 *-aN#*
アナトリア祖語 **-éN#* > ヒッタイト語 *-aN#*

語末の鼻音の前の**e* はアクセントがない場合 *a* になるという、前者の音法則の根拠

---

[10] より詳細な先史の再構成は Yoshida (1991)にみられる。そこでは、ヒッタイト語以外のアナトリア諸語も対象とし、中・受動態語尾も合わせて分析されている。

[11] Melchert (1994: 135)を参照。

は、*pēran* "in front" < **pér-em*、*āppan* "back" < **óp-em*[12]、*-kan* "(sentence particle)" < **´-kem* という例である[13]。それに対して後者は、アクセントがある場合も *a* で現れるというものであるが、*-u̯an* "(supine)" < **-u̯én* "(endingless locative)"によって裏づけられている。アナトリア祖語の**e* がヒッタイト語でどのように現れるかという問題は非常に複雑であるが、うえの２つの音法則の提案において Melchert は独自の根拠を示している。しかしながら、最初の音法則はいくつかの例で裏づけられているが、２つめの音法則の根拠となる例はひとつしかないことに注目されたい。小論では、この２番目の音法則が音韻的根拠に支えられているようにみえるにもかかわらず、それが妥当ではないことを動詞形態論との関連で論じてみたい。

Ⅲ．動詞形態論からの根拠

ヒッタイト語において、１人称と２人称の現在複数形の語尾として、通常の *-u̯eni* (*-meni*)と *-teni* 以外に、*-u̯ani* (*-mani*)と *-tani* という語尾が少数ながら記録されている[14]。その主な例は以下の通りである[15]。

OH	1 pl.	*ak-ku-uš-KI-e-u̯a-ni* "we drink repeatedly" KUB XXXVI 110 Rs. 7
		ḫar-u̯a-ni "we have" KBo XVII 1 I 22; KBo XVII 3 I 17
		pa-i-u̯a-ni "we go" KBo XVII 1 I 20; KBo XVII 1 I 22; KBo XVII 1 I 39; KBo XVII 1 III 43; KBo XVII 1 III 46; KBo XVII 1 IV 7; KBo XVII 1 IV 24; KBo XVII 3 I 15; KBo XVII 3 IV 22; KBo XXII 2 Vs. 15; KUB XXXI 143 II 31; KUB XXXI 143 II 36; KUB XLIII 33 Vs. 4
		pár-šu-u̯a-ni "we break" KBo XVII 4 III 16
OH++	1 pl.	*e-du-u̯a-a-ni* "we eat" KUB XXIX 1 I 15

---

[12] 祖形の**pér-em*、**óp-em* に含まれる**-em* は、ラテン語の *īdem* "this"、サンスクリットの *idam* にみられる。

[13] ヒッタイト語の *-kan* は、ホメロスのギリシア語のκεν、ヴェーダの *kam* に対応する。

[14] 括弧に示された語尾 *-meni* と *-mani* は *u* で終わる動詞語幹においてのみみられる。

[15] データは Yoshida (forthcoming)に基づく。略語一覧：OH＝古期ヒッタイトのオリジナルの粘土板、OH+＝古期ヒッタイトテキストの中期ヒッタイトの時期のコピー、OH++＝古期ヒッタイトテキストの後期ヒッタイトの時期のコピー、OH－＝古期ヒッタイトテキストであるが、記録された時期が不明の粘土板、MH＝中期ヒッタイトのオリジナル、MH+＝古期ヒッタイトテキストの後期ヒッタイトの時期のコピー、MH－＝古期ヒッタイトテキストであるが、記録された時期が不明の粘土板、NH＝後期ヒッタイトテキスト。

pa-a-i-u̯a-ni KBo III 7 VI 6; KUB XXIX 1 I 10

pa-a-i-u̯a-a-ni KUB XXIX 1 I 14

pa-i-u-u̯a-ni KUB XII 66 IV 9

2 pl. *ak-ku-uš-KI-IT-ta-ni* "you drink repeatedly" VBoT 58 I 18

az-zi-IK-KI-ta-ni "you eat repeatedly" VBoT 58 I 18

i[š-t]a-ma-aš-ta-ni "you hear" KBo III 23 IV 15

pa-IT-ta-ni "you go" KBo III 23 Rs. 16

[ša]-aš-nu-uš-KI-IT-ta-ni "you let sleep repeatedly" KBo VII 28 Vs. 25

MH 1 pl. *ar-nu-uš-KI-u-u̯a-ni* "we bring repeatedly" KUB XVII 21 II 7

a-ú-ma-ni "we see" VBoT 1, 12

ḫal-zi-u̯a-ni "we call" KUB XVII 21 IV 11

ḫar-ru-u̯a-ni KUB XXIII 77 Rs. 50

iš-ta-ma-aš-šu-u̯a-ni "we hear" KBo XVI 50 Vs. 11

LI-in-ga-nu-ma-ni "we swear" KUB XVII 21 IV 12

me-mi-iš-KI-u-u̯a-ni "we say repeatedly" KUB XVII 21 II 6

u̯a-al-ḫu-u̯a-ni "we destroy" KUB XXIII 77a Rs. 15

zi-IK-KI-u-u̯a-ni "we put repeatedly" KUB XVII 21 I 5

2 pl. *ma-LI-iš-ku-nu-ut-ta-n[i]* "you make weak" KUB XXIII 72 Rs. 54

na-iš-ta-ni "you turn" KUB XXIII 72 Rs. 58

[ta-aš-nu-u]t-ta-ni "you make strong" KUB XXIII 72 Rs. 54

ú-u̯a-te-IT-ta-ni "you bring" KBo VIII 35 II 7; KUB XXIII 77 Rs. 70; KUB XXIII 78b, 2

MH– 1 pl. *ak-ku-uš-KI-u-u̯a-ni* KBo XV 25 Rs. 17

[x]-du-u̯a-ni "we eat" KBo XV 26, 4

e-ku-u̯a-ni "we drink" KBo XV 26, 7

ḫu-IT-ti-i̯a-an-ni-iš-ku-u-u̯a-ni "we pull repeatedly" KUB XV 34 IV 31

2 pl. *iš-ta-ma-aš-ta-ni* KUB XV 34 II 34

u̯a-al-ḫu-ta-ni "you destroy" KUB XXXIV 49 I 3

MH+ 1 pl. *pa-i-u̯a-ni* VBoT 24 I 33

pa-a-i-u̯a-ni KUB VII 5 II 4; KUB XXXI 42 III 19

ši-pa-an-du-u̯a-ni "we libate" KUB XXXI 42 II 24

da-šu-u̯a-ḫu-u̯a-ni "we make blind" KUB XXXI 42 II 13

te-IK-ku-uš-nu-ma-ni "we show" KUB XXXI 42 II 8

ú-u̯a-te-u̯a-ni "we bring" KUB XXXI 42 II 14

2 pl. *pa-IT-ta-a-ni* KBo VIII 37 Rs. 6

NH 1 pl. *pa-a-i-u-u̯a-ni* KBo V 3 IV 12

pa-a-i-u̯a-a-n[i] KBo V 3 IV 13

この１人称複数の*-u̯ani* と２人称複数の*-tani* という語尾に関しては、すでに研究者の関心を呼び、その起源についていくつかの見方が提出されている。たとえば、Carruba (1966)はルウィ語から借用された語尾と考えている。また、Eichner (1975: 79)は*-tani* を**-th₂en-i* という祖形から導き[16]、*-u̯ani* の *a* は*-tani* からの類推であるとみなしている。さらに、Kimball (1983: 441)は祖形として零階梯の**-u̯n̥* と**-tn̥* を建て、音法則によってそれぞれ**-u̯an*、**-tan* になった後、小辞**-i* が付与されたものと考えた。これらの試みのいずれも説得力のある説明とはいえない。それぞれの見方に内在する小さな問題点は別にして、これらに共通する重大な問題点は、対応する過去語尾が常に*-u̯en* と*-ten* であり、現在語尾と同じ *a* を持つ*-u̯an* と*-tan* が決して現れないという事実が説明されない点である。すなわち、Carruba の見方では、なぜルウィ語からの借用が現在語尾に限られているのかが問題になる。また、Eichner と Kimball の見方も、過去語尾は小辞**-i* を除けば現在形と同じ語尾を持つはずであるのに*-u̯an* と*-tan* は実際には決して現れないという理由でしりぞけられねばならない。したがって、現在語尾と過去語尾のあいだの母音の分布にみられるアシメトリーをどのようにして説明するかが大きな問題として残る。

最近 Melchert はこの問題の解決に向けて、アナトリア祖語の**e* は開音節の位置にあり、かつ前にアクセントがある場合、ヒッタイト語において *a* で現れるという音法則を提案した。

アナトリア祖語 **e* > ヒッタイト語 *a* / ´ ___.

この音法則は１人称と２人称の現在語尾**´-u̯eni* と**´-teni* には適用されて、*-u̯ani* と*-tani* がつくられるが、対応する過去語尾**-u̯en* と**-ten* には適応されない。なぜなら後者の場合**-e* は開音節ではなく、閉音節にあるからである[17]。*-u̯ani* と*-tani* のどちらも語根動詞に現れないことは、この見方が妥当であることを示す強い根拠となる。

---

[16] ヴェーダの２人称複数語尾*-thana* を参照。

[17] 同様に、この音法則は *u*-語幹の形容詞の弱語幹にみられる*-au̯-* も説明する。たとえば、**d(h)éb(h)-u-*（強語幹）、**d(h)b(h)-éu̯-*（弱語幹）→ **déb-u-*、** déb-eu̯-(V) > tēpu-* "small"、*tēpau̯-* などを参照。

なぜなら語根動詞の複数形ではアクセントが語尾に落ちるからである（*-u̯éni と *-téni。これらはヒッタイト語でそれぞれ-u̯eni と-teni として現れる）。うえにあげた-u̯ani と-tani を持つ例についても、その大部分には語尾にアクセントが落ちなかったということを示す独自の根拠が見いだせる。akkuškēu̯ani/akkuškiu̯ani、arnuškiu̯ani、memiškiu̯ani、zikkiu̯ani、ḫuittiu̯anniškiu̯ani、akkuškittani、azzikkitani、[ša]ašnuškittani については、反復相の接辞*´-ské/o-あるいは*-ské/ó-を持っているため、アクセントは語尾にはなかった。また、preverb を持つ paiu̯ani/pāiu̯ani/paiu̯āni/paiu̯ani についてもアクセントは preverb に落ちていた[18]。さらに、aumani は中期ヒッタイトの形式であるが、古期ヒッタイトには umeni(< *au-u̯éni)という形式が記録されている。したがって、aumani は強語幹（2人称単数 autti、3人称単数 auszi < *aú(s)-）の影響を受けて、前ヒッタイトの時期に2次的につくられた（アクセントが語幹に落ちる）*aú-u̯eni から派生した形式と解釈できる。ištamaššu̯ani、ištamaštani、dašu̯aḫu̯ani、mališkunuttan[i]、[tašnu]ttani については、名詞派生動詞であるために、やはり語尾にアクセントが落ちない[19]。u̯alḫu̯ani、u̯ateu̯ani、naištani、u̯atettani、u̯alḫutani については、語幹にアクセントが落ちる単数形にみられる強語幹がパラダイムに一般化されている[20]。ḫaru̯ani/ḫarru̯ani、paršu̯ani、šipandu̯ani、tekkušnumani については、音法則によって強語幹と弱語幹が融合したため、複数形でもアクセントは語幹に移ったと考えられる[21]。以上みたように、-u̯ani と-tani という語尾とアク

---

[18] この動詞の3人称単数と3人称複数現在形を例にとると、祖形としてそれぞれ*pé-h₁ei̯-ti、*pé-h₁i̯-enti が建てられる。後者の複数形のほうは、この祖形から*pǽi̯enti がつくられ、さらに*i̯の脱落と母音融合によってヒッタイト語の pānzi となる。他方、単数のほうは複数形の語幹の影響を受け、2次的に paizzi がつくられたと考えられる。この説明の前提となるのは、*pé-というアクセントを有する preverb である。

[19] ištamaš-には拡張辞*-s-が（*ḱleu-(s-) "hear"からつくられるギリシア語κλέω、古英語 hlystan "listen"を参照）、dašu̯aḫ-には他動詞化接辞-aḫḫ-が、mališkunu-と tašnu-には使役化接辞-nu-が付与されている。

[20] たとえば、u̯alḫ-についてみるならば、この動詞の3人称単数と複数の祖形としてそれぞれ*u̯élh₂-ti と*u̯l̥h₂-énti が建てられる。それぞれの祖形から音法則によって導かれる語幹はu̯alḫ-とūlḫ-である（後者については、*u̯r̥ĝ- > ūrki "track"を参照）。しかしながら、前ヒッタイトの時期に強語幹が複数形にも広がったと考えられる。

[21] たとえば、ḫar(k)-を例にとると、3人称単数と複数の祖形としてそれぞれ*h₂/₃ér-ti と*h₂/₃r̥k-énti が建てられる。いずれの語幹も音法則によってヒッタイト語でḫar(k)-で現れるため、前ヒッタイトの時期にこの融合が生じた後で、強語幹のアクセントのパターンが一般化されたと考えられる。

セントが語幹に落ちることとのつながりは否定できないために、Melchert の説明はこれまで提案されてきたどの見方よりも説得力があると言えるだろう。

しかしながら、Melchert の見方にはまったく問題がないわけではない。まず注意しなければならないことは、*-u̯ani* と *-tani* の分布はヒッタイトの歴史時代を通して通時的な幅があることである。つまり、*-u̯ani* と *-tani* は、一般に *-u̯eni* と *-teni*（< *-u̯éni、*-téni）に取って代わられたにもかかわらず、後期ヒッタイトの時期においてもわずかながら存続している[22]。この状況は、古い特徴を保持している他の動詞語尾とは異なっている。たとえば、*ḫi*-動詞 1 人称単数現在語尾 *-ḫe*（通常は *-ḫi*）、*ḫi*-動詞 3 人称単数現在語尾 *-e*（通常は *-i*）、*mi*-動詞 3 人称単数現在語尾 *-za*（通常は *-zi*）、3 人称複数過去語尾 *-ar*（通常は *-er*）については[23]、*-u̯ani* と *-tani* と同じく音法則によってつくられたが、それぞれ一般的な *-ḫi*、*-i*、*-zi*、*-er* という語尾のヴァリアントとして古期ヒッタイトの記録に残っているだけで、後のヒッタイト語では *-ḫi*、*-i*、*-zi*、*-er* が一般化されている。したがって、なぜ *-u̯ani* と *-tani* という語尾が、*-u̯eni* と *-teni* と比べて数のうえでははるかに少ないにもかかわらず、通時的にみて広い分布を示すのかが問題として残る。

Melchert の見方のより重大な問題点は、対応する過去語尾の 1 人称複数 *-u̯en* と 2 人称複数 *-ten* に関してみられる。筆者はうえで、Carruba、Eichner、Kimball の試みに共通する問題点として、現在語尾 *-u̯eni*、*-teni* および *-u̯ani*、*-tani* と過去語尾 *-u̯en*、*-ten* のあいだにみられる母音の分布にみられるアシメトリーが説明できない点を指摘した。つまり、なぜ過去語尾に *-u̯an*、*-tan* が現れないのかが説明されないかぎり、いかなる試みも説得性を欠くことになる。この点で、Melchert の試みも同様の問題

---

[22] Oettinger (1979: 9) で指摘されているように、*-u̯ani* と *-tani* は後期ヒッタイトでは稀である。

[23] 筆者の調査によれば、それぞれの具体例はつぎ通りである。*iš-pa-an-daḫ-ḫé* "I libate" KBo XVII 3 IV 6 (OH)、*iš-ta-a-ap-ḫé* "I lock" KBo XVII 3 IV 33 (OH)、*ga-a-an-ga-aḫ-ḫé* "I hang" KBo XVII 3 IV 13 (OH)、*me-e-ma-aḫ-ḫé* "I speak" KBo XVII 4 II 4 (OH)、KBo XVII 3 II 12 (OH)、KBo XVII 3 III 4 (OH)、IBoT III 135 I 4 (OH)、*PÍ-e-IḪ-ḫ[é]* "I give" KBo XVII 1 III 31 (OH)、*PÍ-taḫ-ḫé* "I carry" KBo XVII 4 III 10 (OH)、*da-a-aḫ-ḫé* "I take" KBo XVII 4 III 7 (OH)、KBo XVII 3 IV 28 (OH)、*te-e-IḪ-ḫé* "I put" KBo XVII 3 I 16 (OH)、KBo XVII 4 III 8 (OH)、KBo XVII 4 III 10 (OH)、KBo XVII 4 III 18 (OH)、KBo XVII 4 IV 18 (OH)、*tar-na-aḫ-ḫé* "I leave" KBo XVII 3 II 3 (OH)、KBo XVII 3 IV 34 (OH)、*i-i̯a-an-na-aḫ-ḫ[é]* "I march" KBo XVII 4 II 8 (OH)、*a-ša-aš-ḫé* "I settle" KBo III 28 II 24 (OH++)、*u̯a-ar-aš-še* "he harvests" KUB XXIX 30 III 4 (OH)、*ma-az-zé* "he withstands" KBo VII 14 Vs. 8 (OH)、*[e-e]š-za* "he is" KBo VI 2 IV 54 (OH)、*ḫar-za* "he holds" KBo IX 73 Vs. 12 (OH)、*ša-ú-ši-i̯a-ar* "they investigated" Maşat-Brief 6 Rs. 22、*ḫa-a-ni-i̯a-ra-at* "they drew it" Bo 6472, 12、*ú-e-mi-i̯a-ar* "they found" KUB XVII 10 I 37 (OH+)。

を残すことになる。第２節で示した Melchert の２つの音法則は、アナトリア祖語の語末の*-*eN#*はアクセントの有無にかかわりなくヒッタイト語で-*aN#*になるというものであった。この見方にしたがうと、１人称と２人称の過去複数の語尾はヒッタイト語ですべて**-*u̯an*、**-*tan* になるはずである。ここで、説明のための便宜上、ヒッタイト語の動詞をタイプＩとタイプIIに分類する。タイプＩには弱語幹である複数形で語尾にアクセントが落ちる動詞が含まれる（語根動詞、hysterokinetic タイプの動詞など）。他方、タイプIIには複数形の語尾にアクセントが決して落ちない動詞が含まれる（*-*sk̑e/o*-という接辞を持つ反復相の動詞、名詞派生動詞、acrostatic タイプの動詞など）。このタイプＩとタイプIIに Melchert の２つの音法則を適用するならば、それらの先史は図式的につぎのようになる。

前ヒッタイトの初期の段階

		タイプＩ	タイプII
現在	1 pl.	*-*u̯éni*	*´-*u̯eni*
	2 pl.	*-*téni*	*´-*teni*
過去	1 pl.	*-*u̯én*	*´-*u̯en*
	2 pl.	*-*tén*	*´-*ten*

前ヒッタイトの後期の段階

		タイプＩ	タイプII
現在	1 pl.	*-*u̯éni*	*´-*u̯ani*
	2 pl.	*-*téni*	*´-*tani*
過去	1 pl.	*-*u̯án*	*´-*u̯an*
	2 pl.	*-*tán*	*´-*tan*

しかしながら、この図式から予想される複数１人称と２人称の語尾**-*u̯an*、**-*tan* は決してヒッタイト語に現れず、実際に記録に残っている語尾は-*u̯en*、-*ten* である。したがって、実際の-*u̯en*、-*ten* を導くには大がかりな類推の作用が必要となり、しかも *e* という母音が類推によって広がる源はタイプＩの動詞の現在語尾-*u̯eni*、-*teni* 以外にはないのである。このような形態変化は考えられない。さらに、現在形ではともに音法則によってつくられる-*u̯eni*、-*teni* と-*u̯ani*、-*tani* が残っているのに対して、過去形ではうえの２つの音法則によってやはり規則的につくられる*-*u̯an*、*-*tan* が-*u̯en*、-*ten* に完全に取って代わられることになる。これはまったく不可解であるため、これらの動詞語尾の先史は再検討されなければならない。

第２節で述べたように、Melchert が提案した２つの音法則(アナトリア祖語 *´-*eN#*

> ヒッタイト語 *-aN#*、アナトリア祖語 **-éN#* > ヒッタイト語 *-aN#*）のうち、後者の音法則の音韻的根拠は目的分詞*-u̯an* (< 語尾のない単数位格**-u̯én-Ø*)だけであった。しかしながら、この例は２次的な形態的な影響を受けてつくられたと考えることが可能である。ヒッタイト語で目的分詞が現れる構文は、「～し始める」という意味を表すために *dāi-*や *tiia̯-*という動詞とともに用いられる場合に限られている。しかも、この構文において使われる目的分詞の大多数は反復相動詞からつくられる*-škiu̯an* であり、アクセントは語根か接辞に落ちる（**´-skeu̯en* あるいは**-skéu̯en*）。目的分詞のこの限られた用法に注目するならば、少数の目的分詞にみられる**-u̯én* は音法則によって直接*-u̯an* になるのではなく、そのまま保たれ、後に*-škiu̯an* （< **´-u̯en*）で終わる反復相動詞の目的分詞からの形態的影響によって、**-u̯én* の**e* という母音が *a* に変わったと考えることができる。

以上の考察から、アナトリア祖語の**-eN#*は、アクセントがないときにはヒッタイト語で*-aN#*になるが、アクセントがあるときには*-eN#*になるという音法則を提案したい。

アナトリア祖語 **´-eN#* > ヒッタイト語 *-aN#*
アナトリア祖語 **-éN#* > ヒッタイト語 *-eN#*

アナトリア祖語の**-éN#*がヒッタイト語で*-eN#*になったということを直接支持する音韻的な根拠は見当たらないが、このように考えないかぎり、なぜヒッタイト語に１人称複数の***-u̯an* と***-tan* がまったく記録されていないかという問題に妥当な歴史的な説明を与えることは不可能である。うえで提案した音法則は形態論的根拠から導かれるものであるが、それにしたがえば、タイプＩの動詞の複数１人称と２人称は**-u̯én* (< **-u̯én*)と**-tén* (< **-tén*)で現れることになり、タイプIIの動詞に予想される**´-u̯an* (< **´-u̯en*)と**´-tan* (< **´-ten*)が駆逐され、*-u̯en* と*-ten* が一般化される源を動詞過去のパラダイムの内部に得ることができる。また、古期ヒッタイト語の時期にすでに過去語尾の*-u̯en*、*-ten* が一般化されているのに対して、現在語尾の*-u̯ani*、*-tani* が後期ヒッタイト語の時期にまで存続している理由は、３人称複数の過去語尾*-er* と現在語尾*-anzi* に含まれている母音の影響と考えられる。よく知られているように、パラダイムの画一化（paradigm leveling）というプロセスにおいて、３人称の位置が果たす重要な役割は印欧諸言語には顕著にみられる[24]。

---

[24] Benveniste (1966: 225ff.)を参照。

Ⅳ. 結論

小論での分析の結果明らかになったヒッタイト語の複数１人称と２人称の過去語尾の先史を図式で示すと、以下の通りである。

前ヒッタイトの初期の段階

		タイプⅠ	タイプⅡ
現在	1 pl.	*-*u̯éni*	*´-*u̯eni*
	2 pl.	*-*téni*	*´-*teni*
過去	1 pl.	*-*u̯én*	*´-*u̯en*
	2 pl.	*-*tén*	*´-*ten*

前ヒッタイトの後期の段階

		タイプⅠ	タイプⅡ
現在	1 pl.	*-*u̯éni*	*´-*u̯ani*
	2 pl.	*-*téni*	*´-*tani*
過去	1 pl.	*-*u̯én*	*´-*u̯an*
	2 pl.	*-*tén*	*´-*tan*

古期ヒッタイト語

		タイプⅠ	タイプⅡ	
現在	1 pl.	*-u̯eni*	*-u̯ani* ~ *-u̯eni*	(← 3 pl. *-anzi*)
	2 pl.	*-teni*	*-tani* ~ *-teni*	(← 3 pl. *-anzi*)
過去	1 pl.	*-u̯en*	*-u̯en*	(← 3 pl. *-er*)
	2 pl.	*-ten*	*-ten*	(← 3 pl. *-er*)

参 考 文 献

Anttila, Raimo

1972 *An Introduction to Historical and Comparative Linguistics*. New York: The Macmillan Company.

Benveniste, Émile

1966 *Problèmes de linguistique générale* I. Paris: Gallimard.

Carruba, Onofrio

1966 "Die Verbalendungen auf *-wani* und *-tani* und das relative Alter der heth. Texte." *die Sprache* 12, 79-89.

Eichner, Heiner

1975 "Die Vorgeschichte des hethitischen Verbalsystems." *Flexion und Wortbildung (Akten der V. Fachtagung der indogermanischen Gesellschaft,* Regensburg, 9.-14. September 1973) ed. by Helmut Rix, 71-103. Wiesbaden Dr. Ludwig Reichert Verlag.

Kimball, Sara

1983 *Hittite Plene Writing.* Ph. D. dissertation, University of Pennsylvania.

Melchert, H. Craig

1994 *Anatolian Historical Phonology.* Amsterdam: Editions Rodopi B. V.

Neu, Erich

1989 "Zu einer hethitischen Präteritalendung *-ar.*" *Historische Sprachforschung* 102, 16-20.

Oettinger, Norbert

1979 *Die Stammbildung des hethitischen Verbums.* Nürnberg: Verlag Hans Carl

Yoshida, Kazuhiko

1990 *The Hittite Mediopassive Endings in* -ri. Berlin: Walter de Gruyter.

1991 "Reconstruction of Anatolian Verbal Endings: The Third Person Plural Preterites." *The Journal of Indo-European Studies* 19, 359-374.

forthcoming "A Further Remark on the Hittite Verbal Endings 1 pl. *-wani* and 2 pl. *-tani.*" to appear in *Papers on Indo-European Topics in Honor of Eric Hamp (The Journal of Indo-European Studies Monograph Series)* ed. by Douglas Q. Adams.

（よしだ　かずひこ、京都大学）

A Phonological Rule Motivated by Morphological Evidence: A Case in Hittite

Kazuhiko Yoshida

Summary

While Proto-Anatolian *´-*eN#* became *-aN#* in Hittite (e.g., *peran* "in front" < **pér-em*, *appan* "behind" < **ópem*, *-kan* "(sentence particle)" < *´-*kem*), *-*éN#* remained intact. The latter rule at first glance seems to be counter to *-u̯an* "(supine)" derived historically from the endingless locative singular form *-*u̯én*, which is, however, a secondary product morphologically influenced by more frequent supines in *-škiu̯an* (< *´-*u̯en*). Although there do not seem to be any examples which are direct outcomes of the phonological rule *-*éN#* > *-en#*, it is simply impossible to reasonably explain without this rule why neither 1 pl. preterite ending **-*u̯an* nor 2 pl. preterite ending **-*tan* is attested. Following this rule, however, *-u̯en* (<*-*u̯én*) and *-ten* (< *-*tén*) will be reliable sources which acted as loci from which *-u̯en* and *-ten* were generalized. Why the generalization of *-u̯en* and *-ten* was regular while both *-u̯ani* (< *´-*u̯eni*) and *-tani* (< *´-*teni*), the corresponding 1 pl. and 2 pl. present endings, are actually attested in Hittite manuscripts besides usual *-u̯eni* (< *-*u̯éni*) and *-teni* (< *-*téni*) is due to the pressure of the vocalism of the 3 pl. preterite ending *-er* and 3 pl. present ending *-anzi*. As is well known, the critical position of the third person in paradigm leveling is evident in Indo-European languages.